

御所まち

伝建通信

文化財課 電話 60・1608

第11回

外観から見る 建物の変遷

(2) 近代の景観

江戸幕府の支配から解放された明治時代。西欧文化の影響で近代化が進み、人々の暮らしが大きく変化しました。今回は明治時代以降の「近代」と呼ばれる時代の御所まちの景観についてお話しします。

江戸時代、建物を建てる際には、天井を低くしたり、細い木材の使用が義務付けられていたりときさまざまな規制



①明治13年(1880)の町家

1階手前はガラス戸の外に鉄格子、奥は太い格子を設けている。2階手前は鉄格子付きのガラス窓、奥はモダンな虫籠窓と、居室ごとに窓の意匠を変えている。伝統的な形式を用いつつも、西欧的な要素が入り混じる和洋折衷の町家である。



②角格子のガラス窓

がありました。明治時代になると、それらの規制が撤廃され、自由な建築が可能になりました。御所まちの近代町家を見てみると、2階は高く、木材は太くなり、建具のデザインも多様性に富んでいます。この自由な気風の中で、職人たちは腕を振るって建物をつくり、技術力は格段に向上しました。ちょうどその頃、ヨーロッパでは、日本の美術工芸品が流行し、芸術家たちの作品に大きな影響を与えた、いわゆるジャポニズムブームが起こります。



③アール・デコ様式のシヨウウィンドー

このジャポニズムの背景には、明治時代の職人の高度な技術と自由な発想力が根底にありました。20世紀に入ると、伝統的な形式に西洋の文化が加わった大正モダニズムが流行します。写真②は一見して木造の伝統的な格子窓に見えますが、直線をパターン化した西洋的な幾何学模様を用いられています。このような直線的でシンプルなデザインを「モダン」と表現します。他にも、欧米化の流れを引き継いだ石積み風の壁や石貼りの腰壁なども見られます。幾何学模様をモチーフにした装飾表現は、西欧ではアール・デコ様式といい、20世紀前半に一大ブームを巻き起こします。商業が盛んであった西御所では、大正と昭和初期にかけて、アール・デコ様式のシヨウウ



④石造風の建物

インドー(写真③)が町並みを彩り、基礎をモルタル洗い出し仕上げにして、面をモルタルたたき仕上げにして、あたたかも石造のオフィスビルのように見える建物(写真④)や、インターナショナル・スタイルの外装(写真⑤)なども現れます。



⑤インターナショナル・スタイル

個人や地域の特性を超え、世界共通の様式を目指したデザイン。直線的な表現等が特徴。

江戸時代の伝統的な町家だけでなく、明治・大正以降の近代的な意匠を取り入れた建物が多く軒を連ねる様子は、多様性に満ちた御所まちの町並みの特徴でもあります。御所まちを歩く際には、時代ごとの特徴やデザインの変遷を楽しんでみてはいかがでしょうか。